

デンマークの自然保育における保育環境とリスクに関する研究 — 森の保育園実践者によるインタビューを中心に —

A Study on The Childcare Environment and Risk in The Danish Forest Kindergarten
— Focusing on Forest Kindergarten Practitioner's Interviews —

柴田 卓*

Suguru Shibata

伊藤 哲章*

Tetsuaki Itou

柴田 千賀子**

Chikako Shibata

The authors have been studying about the effectiveness and characteristics of childcare at the forest kindergarten in Denmark. In this research, we focused on risk taking which becomes a serious problem when we try to practice childcare in nature. Our study purpose in a forest kindergarten model in Denmark is to clarify how risk is perceived in their country. As a result of interviews done with three Denmark practitioners, it became clear that risk is something to be avoided, but it also has a very important role in the growth of children. In addition, it is also understood that the childcare professional and parents know the importance of taking risks.

Additionally, we began to see that in order for risk to be beneficial for children, it is important to know what the children's interests and learning level are. This in turned helped us to discern that mutual trust between children and teacher is essential during the learning time.

Keywords: Forest School, Forest Kindergarten, Risk, Risky play, Risk take,

1. はじめに

「ふくしま新生子ども夢プラン」¹⁾によると、東日本大震災による子どもへの影響で心配なことの第1は放射線による健康被害、第2位は外遊び自然体験の不足、第3位は運動不足であった。その後、6年が経過した2017年の学校保健統計調査では、5つの年代で福島県の肥満が全国ワースト1位となった。原発事故による放射線の影響から、屋外での自由遊びや自然体験を自粛・制限した時期があったことが影響しているのは明らかである。その後、除染が進み屋外での活動制限が解除されたにもかかわらず、幼少期において肥満傾向が改善されていないのは、福島県の子どもの健康における喫緊の課題と言えよう。体を動かして遊ぶ楽しさを実感することで外遊びを日常化・習慣化すること、保育者がその必要性和重要性を認識し意図的かつ総合的に取り組むこと、こうした課題に対し保護者と一体となって取り組むことが求めら

* 幼児教育学科 ** 仙台大学

れている。

このことは、幼児期における自然体験活動に関しても同様である。保育の中で自然との関わりを積極的に取り入れるためには、これまで踏襲してきた方法に加え、様々な側面からアプローチすることが必要であろう。しかし、外遊びや自然保育を積極的に実施するとなれば、事故やケガが起きた時の対処・責任・賠償など、保育者が最も懸念する事項がリスクではないだろうか。こうした外遊びや自然保育におけるリスクへの関心は高まり、今西ら²⁾は国内の森のようちえん実践者へアンケート調査を実施し、ケガの発生回数・種類・原因を明らかにした。また、自然環境で活動することで、子どもの危険回避能力が向上する可能性について指摘している。リスクや危険な遊びへの関心は国外においても高まり、英国国立健康・臨床研究所は「過度のリスク回避」に対抗する政策を求め、「年齢や能力に応じてリスクを評価し管理するスキルを開発する」ことを促す障害予防ガイドライン³⁾を発表している。リスクに対して、子どもの安全を確保することやカリキュラムの目標を達成するためにリスクをすべてコントロールすべきだとする否定的な側面を強調する考えと、子どもの自尊心、信頼、自立を促進するためにリスクのメリットを強調する考えとの議論が絶えないのである。

筆者らは、これまでデンマークの森の保育園に足を運び、ナラティブな視点で森の中での保育がもたらす効果や特徴について論考を重ねてきた。その中で、デンマークの森の保育園の保育者は筆者らのリスクに対する関心に反して取り立てて対策や配慮すべき点を語るということとはなされなかった。つまり、我が国で野外での保育を実践しようとするときに大きな課題となるリスクという課題に対して、こちらが求める回答が得られにくいという実態があったのである。これは、単に認識の差異がもたらすものなのか、リスクそのものの捉えが異なるのか、もしそうならばデンマークの自然保育におけるリスクは、どのように認識されているのか。このリスクの認識を明らかにすることは、デンマークにおいて自然保育が特異な保育スタイルとしてではなく一般的な保育実践の場として社会から市民権を得ていることに繋がる重要な示唆を与えるのではないかと考える。

以上のことから、本研究は自然保育に焦点を絞り、デンマークの森の保育園に携わる3名の実践者にインタビューを試みた。この3名の実践者から、デンマークの森の保育園では、屋外の環境をどのように捉え、リスクをどのように捉えているのか、また保護者はリスクに対してどのような価値観を持ち、どのように共有しているのか等について、例証することが本研究の目的である。

2. 研究方法

本研究におけるインタビューは、2018年8月30日から9月2日に実施した。訪問施設及び

インタビュー対象者は以下の通りである。また、現地デンマーク語にてインタビューを実施するため、澤渡夏代ブラント氏にコーディネートを依頼し、大野睦子ビューアソー氏と中田和子氏に通訳を依頼した。訪問およびインタビューに関しては、事前に承諾を得ている。①と②の施設に関しては繰り返し視察訪問を実施し、その保育理念や保育内容について報告^{4) 5)}している。本研究に対しても協力的かつ良好な関係を構築している。③の施設に関しては、今回が初めての訪問である。訪問を依頼するきっかけは、ウィリアムス・シイグフレッドセン(以下、ウィリアムスと表記)の著書『デンマークにおける森林を活かした学校の理解～初等教育の実践』(*Understanding the Danish Forest School Approach —Early Years Education in Practice.*)との出会いである。この著書は、デンマークの森林を活かした保育について、その全体像を提示した数少ない書籍である。④の施設は、ウィリアムス氏が関連する自然保育園であり、視察訪問を快く承諾していただいた。

それぞれのインタビューに関しては、半構造化面接法を採用し、約1時間の問答を行いその内容を録音した。インタビュー実施者は、筆者柴田卓である。本研究では、はじめに自然保育におけるリスクに関連した先行研究を提示した上で、デンマークの森の保育園実践者によるインタビュー調査の内容について例証する。

【訪問先及びインタビュー対象者】

①スコウボ森の保育園 Skovbo private Skovbørnehaven 2018年8月30日

ロバート・グランダル氏 Robert Grandahl

②ステンリュース森の保育園 Stenlose private Skovbørnehaven 2018年8月31日

シャロット・ノルグレン・イェンセン氏 Charlotte Nørgren Jensen

③インサイドアウトネイチャー Inside-out Nature 2018年9月3日

ジェイン・ウィリアムス・シイグフレッドセン氏 Jane Williams-Siegfredsen

④ホンドルファス自然保育園 Natur Høndruphus 2018年9月3日

カミラ・ディン・フリス氏 Kamilla Degn Friis

3. 保育における危険な遊びに関する世界の動向

はじめに、本研究のキーワードであるRisky playは、リスクを伴う環境での遊びや適切なルールや方法を知らないことでケガに繋がる可能性のある遊びと解釈し、「危険な遊び」として統一した。具体的には、木登り(落ちる)、焚火(火傷)、川や海で遊ぶ(溺れる)、自然散策(迷子)、ナイフで削る(切り傷)、戦いごっこ(ケガ)をするなどである。また、Risk takeに関

しては、危険を冒す、危険に向き合う、危険に対処するなど文脈によって若干の違いがあるため「リスク・テイク」で統一した。

サンドスター (Sandseter : 2007) は、ノルウェーの2つの幼稚園から38名の子どもと7名の保育者へのインタビューや観察を通して、危険な遊びを6つのカテゴリー (高さ・スピード・道具・危険な環境・戦いごっこ・迷子) で分類した。またそのほとんどが屋外で発生し、自由でかつ冒険的な身体活動であるとした⁶⁾。さらにサンドスター (Sandseter : 2009) は、同国で2つの幼稚園の4歳と5歳の子ども29名をビデオ観察し、この6つのカテゴリーとの関連から、子どもの危険を伴う遊びにおける事故やケガに影響を与える要因について考察している。その結果、実際に危険が誘発されるか否かについて、環境特性と子どもの個々の特性が関与することを明らかにした⁷⁾。

リトルら (Little : 2012) は、屋外遊びの中で、積極的にリスクと関わることは、子どもの健康や発達の側面からも重要であるとした上で、こうした有益で発展的な危険な遊びが、回避されるべきものとみなされることに警鐘を鳴らしている。そこで、オーストラリアの保育者17名に対して12か月、ノルウェーの保育者14名に対して9か月の撮影およびインタビューを実施し、異なる文化的背景から危険な遊びにおける保育者の認識の変容について調査している。結果として、両国の保育者が危険を伴う遊びの重要性を認識していることが明らかになり、それらを実践する際には、オーストラリアの保育者の方が困難さを感じていることが明らかになった。その要因として、屋外環境の質やその規制制度、訴訟環境といった現場の保育者に直接的に関連しない要素が影響しているためである⁸⁾。

さらに、リトル (Little : 2014) は、リスクとリスク・テイクに関する親の認識に着目し、4歳児と5歳児の両親の見解に焦点を当てている。シドニーの6つの保育園に通う4歳～5歳の母親26名を対象にインタビュー調査を実施した。インタビュー項目は、屋外遊びの重要性、リスクとリスク・テイクの認識、母親が子どもだった時の経験と子どもの経験、子どもの屋外遊びの機会に影響を与える要因である。この研究の母親によって、危険に向き合う意欲が学習や成長にとって不可欠な要素であるという認識が強調された。しかし、同時に親が子どもの頃には存在しなかった予期せぬ危険に対し不安を抱いていることも示された。結びに、リスクを選択したり、探求したりできる環境の中で、自律した体験ができよう子どもを育てるべきであり、それは親だけの責任ではない。子どもが自身で危険管理するための学習の場やそうした力を発揮できる安全な遊び場に地域全体で変えていくことが必要であると提言している⁹⁾。

ブルッソーニら (Brussoni : 2012) によると、障害予防は子どもを安全に保つために重要な役割を果たす一方で、近年の先行研究から子どもの屋外環境における危険を伴う遊びに対する制限をあまりにも多くすることは、子どもの発達を妨げるとした上で、健全な児童発達に必要な要素として遊びの重要性を概説し、野外における危険を伴う遊びの必要性を支持する根拠に

について再検討している。検討の視点は、1. 自由遊びとは何か、2. 屋外における自由遊びの減少、3. 屋外における危険を伴う遊びへの支援、4. 代替的な危険を管理する自由遊びの環境であり、様々な分野の文献から論考されている。この4つの考察から、子どもの遊びを取り巻く環境を「可能な限り安全」にではなく、「必要なだけ安全」に保つというパラダイムの転換が子どもの最適な成長を促進することを示唆している¹⁰⁾。

ウィリアムス (Williams : 2012) は、デンマークの森林を活かした保育について、「歴史的背景」、「理論と実践」、「デンマークの教育」、「学習環境」、「保育カリキュラム」、「保育における組織」、「デンマークの森林を活かした保育の展望」の6つの章から体系的にまとめている。各章の最後には、内容を振り返るためのポイントと考察するための問いが掲載されている。本研究と特に関連するのは第4章の学習環境であり、屋外環境の特性、リスクとチャレンジ、子ども・親・保育者・社会の視点から観た危険な遊びの重要性、危機管理、事故対応について取り上げている¹¹⁾。この第4章のリスクに関連する内容について、ウィリアムス氏にインタビューを実施した。

4. デンマークの森の保育園実践者へのインタビュー

1) インサイドアウトネイチャー ウィリアムス氏へのインタビュー

Jane Williams-Sieghfredsenは、イギリス出身で1999年までBridgwater Collegeの講師を務めている。2000年よりデンマークに移り住み、インサイドアウトネイチャーの設立に携わり、ディレクターに就任。主にフォレストスクールトレーニングコースや保育者研修などを開講している。また、世界各国のカンファレンスで講演等を行っている。以下にウィリアムス氏へのインタビュー内容を報告する。

①東日本大震災後の福島の子どもの現状について

柴田：福島では、震災後に外遊びが制限され、運動不足や肥満が問題となっている。除染が進み制限が解除されつつある中で、外遊びや自然遊びを震災前以上に普及させたい。そのためには、これから保育者を目指す学生と現役の保育者に自然遊びのおもしろさとその重要性を伝えたいと思っています。

ウィリアムス：デンマークでもiPadが普及し、屋内で保育する時間が増えてきたように思います。ですから、保育者に自然遊びを伝えることはとても大切なことです。イギリスで教えていた時、多くの保育者が子ども達を監視することばかりに気を取られ、子ども達の中に入り込んで関わることの大切さに気づいていませんでした。また、保育を計画することに重点を置く保育者も多く、自然の中で子ども達と一緒に遊び、自然と触れ合うことが大切だと思います。

②リスクやケガへの保育者の責任や保護者の理解について

柴田：近頃、日本の若い保育者や学生は自然に関心のない人が多いように思います。だからこそ、自然遊びを伝えたいのですが、リスクやケガをすることや、その責任を保護者から問われることをとても恐れています。デンマークではどうでしょうか？

ウィリアムス：保育者や保護者がリスクやケガを過度に心配することは、日本だけではなく他の国でも同じです。イギリスでも、少しでも傷を負うと保護者は大騒ぎします。しかし、デンマークはそうではありません。デンマークでは文化が違います。他の国に比べ、自由度が高いように思います。同時に、大人の子どもに対する信頼感、保護者が保育者に対する信頼感が圧倒的に高いのです。デンマークでは、信頼するということがとても大切なのです。保育の実践では、保護者から「それは危ない、ケガをしたらどうする」などと言われることがあるかもしれませんが、しかし、信頼感があれば心配などしないのです。つまり、保護者が安心するレベルまで信頼度を高めるということが重要で、そのことは保育者としての自分に対する評価が高いということでもあるのです。デンマークでは、保護者が保育者を信頼し、子ども達も保育者を信頼しているという相互の関係が成り立っているのです、自由度が高いのです。

③危険な遊びと、リスクに対する価値について

柴田：著書でも触れていましたが、危険な遊びと、リスクに対する価値について詳しく説明してください。

ウィリアムス：はじめにリスクについてお話しします。リスクに関しては、デンマークの保育者養成でも扱われる内容です。私が主催する保育者トレーニングコースでは、まず観察からはじめます。自然の中に入り、動植物を観察します。例えば、この季節（視察時は9月初旬）に森へ入ると、キノコなどのたくさんの食べ物があります。その中には、食べられる物もありますが、毒のある物もあります。森の保育園で働くには、何に毒があるのかを知る必要があるのです。そして、子ども達にこう言います「これはとてもきれいな色をしていますが、触ってはいけません。なぜなら、手に毒がついてそれを食べてしまうと病気になってしまいます。」と。つまり、保育者はリスクを評価する必要があるのです。その上で、リスクを子どもにとって価値のある物へ変える必要があります。キノコには毒があるから危険だと結論付ければ、2か月間は森へ行くことはできなくなります。子ども達が毒キノコを触ったり、食べたりしないように見ている必要があります。もし、何かが起きたらどうするかを知っておくことも必要です。例えば、森の保育園に来て間もない子どもがいたとします。その場合、まず一番小さいグループに入り、何が危ないかという正しい知識を伝え、子ども達もそのことを理解します。つまり、観察とリスクの評価が重要になるのです。次に、入園して間もない子どもが3人いたとします。ナイフでの削り方を教える場合、3人一緒ではなく、一人ずつ順番に削らせます。大切なのは

とても小さいステップで段階的に進めていくことです。そして、子どもを理解することが大切なのです。また、保育者が傍にいないと不安な子どもいれば、自閉症のように支援の必要な子どもいますが、この地区の自治体では森の保育園を勧めています。森の保育園には十分なスペースがあり、静かで安全だからです。都市部の保育園に比べて森の保育園は、大声を出しても響かず、騒音が少ないのです。騒音が大きいと子どもがイライラし、攻撃的になる可能性があります。自然の中はスペースも十分にあり、1人になりたい時は、1人になることができ、いつでも落ち着くことができるのです。

④子どもの成長とリスクの価値について

柴田：子どもが成長する上でのリスクの価値について、詳しく教えてください。

ウィリアムス：大切なことは、リスクを子どもにとって価値あるものへ変えることです。しかし、その子にとって、あまりにもリスクが高い時は止めた方が良く、子どもにとって挑戦する価値があるのであればやれば良いのです。ほとんどの両親は、保育園のリスクについて理解し、リスクとチャレンジの関係性についても理解しています。生きていく上で、リスクをすべて取り除くことは不可能ですよね。子ども時代に木登りやナイフを使うなどのリスクを経験しなければ、10代になって余計に危ないことを起こすでしょう。むしろ、リスクを経験して来なかった人の方が危ないのです。リスクは、自然の中だけではないのです。森の保育園でも、子ども達を町へ連れていくことがあります。道路を渡る際の車や自転車もリスクです。様々なことからリスクを学ばなければならないのです。子ども自身がリスクを評価しなければならないのです。しかし、残念ながら、多くの人が森の保育園は危険だと思い込んでいるのですが、実はその逆なのです。事故やケガは一般的な保育園で起こることの方が多いのです。誰でも多少のケガは経験するはずですが、自分で自分を傷めつけるようなことはしないですよね。経験から学ぶのです。転んだら痛いという経験が大切なことです。痛みを知るということは、リスクを評価することでもあるのです。経験を通した学びなのです。次にどうしたら良いか、次のステップはどの程度が良いかということ学ぶのです。

もう一つ重要なこととして、森の保育園では年上の子どもが小さい子どもにリスクについて教えたり、助けたりします。森の保育園の多くは柵や塀などの境界線がありません。見学者達は、子どもが迷子にならないのかと驚きますが、どうして子ども達は逃げる必要があるのでしょうか。どの森の保育園にも暗黙の境界線があり、年上の子どもが警察官の役割を果たしてくれます。境界線の目印が木の場合もあります。普段から見える範囲であれば、どこへ行っても良いと言いますが、散歩などの際にはこの印のついた木で待つことを保育者は毎回伝えます。年上の子は、分岐点や暗黙の境界線を知っているのです。子ども達との信頼で成り立っているのです。だからと言って放置しているのではなく、子ども達のことをしっかり観察しています。

私の研修では、理論もありますが、保育者を森へ連れていきます。2000年前後に生まれた子どもは、自然の経験が少ないと言われ、雨が降ると外へ行かないと言います。ですから若い保育者を自然に連れ出すことはとても大切です。同じことは両親にも言えます。森で子ども達が経験する遊びと同じことを体験してもらいます。保護者達も面白いと言います。学びは面白くなければならない。

それでは実際にデンマークの森の保育園の学習環境を見てみましょう。



図1. インサイドアウトネイチャーにて、ウィリアムス氏と撮影

2) デンマークの森の保育園における保育環境

デンマークで一般化されている森の保育園および自然保育園のスタイルは様々である。スコウボ森の保育園は近隣の鹿公園を保育環境として活用し、ステンリュース森の保育園は、ステンリュース市内に集合場所を設置し、そこからバスで森へ移動するスタイルである¹²⁾。ここで取り上げるホンドルファス自然保育園は、デンマーク第2の都市オーフス (Aarhus) から西へ約80キロに位置するリンダム (Lindum) という小さな町の保育園である。1993年にスタートし、かやぶき屋根の小さな園舎と広大な園庭の広がる自然保育園である。現在26名の子どもが在籍し、スタッフは5名である。保育者のフリス氏によると、本園は保育者が必要に応じて園舎と外の環境を使い分けているという。保育中のほとんどは広大な森で過ごすのが、広い森から小さい園舎に入ることで、子ども達は静かにしなければならないことに気づくという。また、3歳児のグループにとって屋外の環境は、天候や動植物などの刺激が多く、食事に集中できないため昼食は園舎を利用している。このように、当該園では子どもの発達や状況に応じて屋外と屋内の環境を使い分けていることが理解できる。

一方、園舎内は昼食スペース、ロッカー (図7)、午睡スペース、生き物の水槽、森での収集物を飾る展示ボックス (図5)、薪ストーブ (図8) が配置されている。薪ストーブを使用するために、子ども達は日常的に薪を集めている。屋外環境では、園舎近くでニワトリ (図9) とヤギ (図10) を飼育しており、箱形のプランター (図11) で野菜の栽培を行っている。植物や動物の世話は、子どもはもちろん保護者も一緒に行っている。デンマークのほとんどの保育園には「週末



図2. フリス氏

就労日」という保護者が園に来て掃除や修繕を行う日が設けられている。こうした週末就労日を利用して、保護者は子ども達の保育環境を理解し、リスクを含む子どもの学びについて評価しているのである。ツリーハウス(図15)も保護者の製作によるものであり、かやぶき小屋(図16)の修繕も行うという。また、ファイヤープレイス(図13)は、暖を取る、おやつを食べる、談話をする等に使用され、森の保育園に限らず他の多くの保育施設の園庭でもみることができる。



図3. 園舎およびアトリエ



図4. 園舎内の様子



図5. 森のコレクション



図6. 園舎の様子



図7. ロッカースペース



図8. 薪ストーブ



図9. ニワトリ小屋



図10. 飼育動物(ヤギ)



図11. プランター

切り倒したブナの巨木(図20)は、園舎にある薪ストーブで使用するため枝の部分の薪の大きさに割り、薪置き場(図21)まで子ども達が台車を使って運んでいく。視察時は、薪の下に大きなカエルが隠れており、その偶然の出会いに子ども達は大騒ぎをして楽しそうな表情を見せていた。前述したように、この保育園の園庭にも塀や柵といった園の内外を隔てる境界線は

なく、園庭には見渡す限り森(図22)が広がっている。ウィリアムス氏が説明したように、巨木(図23)が暗黙の境界線となり、その先は道が分岐していたが、子ども達は木のふもとで待っていた。こうした目印としての岩や植物が境界線として存在し、年長の幼児が年少児にその意味を伝え、園外に出ていくことのないように見張り役をしているのである。このように、



図12. 園舎周辺の様子



図13. ファイヤープレイス



図14. 昼食中の様子



図15. ツリーハウス



図16. かやぶき小屋



図17. お昼寝スペース



図18. あすまや



図19. 固定遊具



図20. 倒木の遊具



図21. 薪置き場



図22. 広大な空間



図23. 境界線の木

ホンドルファス自然保育園に限らず、自然を活用した保育園の環境には、火を扱う、刃物を使用する、高さのある木に登る・渡るなどの危険な遊びが日常的に繰り返され、そのことを保護者は十分に理解し、生きるために大切な事を学ぶ保育環境として認識していることが理解できる。

3) スコウボ森の保育園 グランダル氏へのインタビュー

① デンマークにおける子どもの傾向

柴田：デンマークの最近の子どもの傾向について教えてください。

グランダル：近年、デンマークでは子どもの肥満が増加傾向にあります。本園は園庭や公園などを利用しながら1日中外で過ごしますから肥満児はいません。本園に入園した肥満傾向の子どもは、すぐにスマートになります。また、最近のデンマークの調査では、14歳で自己肯定感が低くなっているという報告もあります。これまで以上に、子どもの頃から自分らしく遊ぶことが重要になってきているように思います。

実感として気になることは、子どもに対する親の過保護です。衣服の着脱など、自分の身の回りのことを自分でできない子が増えているように思います。

② 外遊びや運動に関して

柴田：運動や外遊びにおけるガイドラインはありますか。

グランダル：学びのプランの中で、外遊びや運動に対して何時間以上行うというガイドラインはありません。デンマークでも、外遊びを1日に1時間くらいしか行わない保育園もあります。それが嫌で、本園に移ってきた子もいるくらいです。外遊びや自然遊びが大切だということを頭ではわかっているけど時間がないという若い夫婦が増え、自分達で森へ行く機会が減ってきているのです。だからデンマークでは森の保育園に人気が集まるのだと思います。本園は、5つの市から子どもが通っています。一番遠い子は、25km離れた町から通っている子です。

また、デンマークではICTを推奨しており、国が支援を行っています。ほとんどの一般的な保育園では、1人に1台のiPadを持たせています。小学校以降では、デジタル化がかなり進んでいます。しかし、ここでは一切使っていません。ほとんどの家庭でiPadを使っているのだから、本園で使用する必要はないと考えています。運動やICTもそうですが、大人が何かをさせるとなると、そこには子ども達のモチベーションが存在しなくなってしまいます。ですから、本園では子ども達が自らやってみたいと思うモチベーションを一番大切にしています。もうすぐ、新しい学びのプランが出ることになっていますが、その中では子どもの遊びの重要性に対して、意識を高める内容になると思います。

③森や自然を活かした保育環境に対するスタッフと保護者の意識について

柴田：スコウボのスタッフや保護者は、森や園庭の保育環境をどのように捉えていますか。

グランダル：興味深いのは、本園に通う子どもの保護者は、自然で遊ぶことに関心があり、本園に一番期待していることが、屋外で過ごすことであり、自然の中で遊ぶことなのです。さらに、保護者は本園の価値観を十分に理解し、園とスタッフに対して信頼を置いているところからはじまっているのです。新入園児の保護者に対して一番大切にしていることは、信頼して任せて良いと思うところまで、具体的かつ正確にはっきりと伝えるようにしているのです。保育活動やスタッフ対応などに加え、特に森に子どもたちを連れて行くところな危険やケガをすることがあるということを伝え、危険についても前もってしっかりと説明しています。もし、大きなケガをした際には、こうするという段取りも予め説明しています。もちろん、ケガをすることが良いということではなく、子ども達の成長にとって、森の中での遊びが大切なことであるということを十分に伝えていきます。つまり、リスクをすべて管理し取り除こうとすることは、子ども達がこうしたら危ないということを学ぶ可能性と機会を奪っていることでもあるのです。ここで良い役割を果たすのが、在園児の保護者です。在園児の保護者達が新入園児の保護者に対して、本園の価値観や良さについて話してくれます。新しい保護者は、在園児の保護者の話すことはたいい信じますから、送り迎えで子どもを心配そうに見守ることは、1か月もしないでなくなります。

④保護者とのリスクの共有について

柴田：スコウボでは、保護者とリスクをどのように共有していますか。

グランダル：保護者が心配する内容として、最初に見るところは保育士です。どんな関わり方や言葉かけをしているかなど、保育士の態度や対応です。親と保育士の関係が良ければ、子どもも理解して安心して遊びます。ですから、本園では、送り迎えの際に1分でもいいからエピソードを話すように心がけています。保護者会を開いて30分話すより、毎日少しでも良いから話をすることの方がよっぽど理解をしてくれます。そう心がけているからか、保護者も頻繁に保護者会を開催することを望んでいません。また、毎日のコミュニケーションに加え、子育てのことで心配なことがある時や、スタッフ間で親と話したほうが良いと思うような時は、時間を設定してコミュニケーションを取ることもあります。その他には、ちょうど明日開催される保護者交流会(週末就労日)があります。この交流会は自由参加で、保護者が棚をつけたり、ウサギ小屋の掃除をしたりして、その後にケーキやサラダなどを持ち寄り、グリルを楽しみます。サマーパーティーで、家族で園に来て食事をして楽しんだり、クリスマス会、敬老の日〔鹿公園に一緒にお弁当を持って行って楽しんだり〕します。それから、保護者が企画するパーティーに参加することもあります。このようにして、日々保護者とコミュニケーションを

取ることを大切にしています。毎日のコミュニケーションに加え、保護者が定期的に園に来る機会を設定することで、園や自然公園におけるリスクの存在やそこでの子どもの遊びを理解することができるのです。日本では、ケガをしたら保育士や保育園の責任となる場合があると聞きましたが、デンマークはそうではありません。そのような管理下では働けないし、成り立たないと思います。デンマークにも、いろいろな保育園がありますが、うまくいっていない保育園は、子どもの遊びや成長を一番考える前に、こうしたらこう言われるなどと、親の顔色を窺っているところではないでしょうか。一番大切なことは、子どもの事を理解し、子どもの発達を理解することです。



図24. 雨の中、外で遊ぶ子ども達



図25. 雨の中、軒下でランチ



図26. 主任のグランダル氏

4) ステンリュース森の保育園 イェンセン氏へのインタビュー

① ステンリュース森の保育園におけるリスクの認識

柴田：ステンリュースの森の保育園では、リスクをどのように捉えていますか。

イェンセン：子ども達は、ちょっと危ないと思う経験や自分には難しいけれど挑戦になるという経験をすることによって、自分は何かができるのか、何がまだできないかということを知ることができます。子ども達は、そうした経験によって危ない時にどういう判断が必要なのか、どのように対処したらよいのかということを自分で学んでいきます。このような学びや経験は、その後の学校生活を含め、生きていく上で必要な力となるのです。私は、以前10年ほど町の中にある普通の保育園で働いていましたが、その時の方が今の森の保育園よりケガの数が多かったように思います。これまでに本園で一番大きなけがは骨折が1度だけでした。それは普通の石につまずいて転んだ時のことです。本園の子ども達は、どうしたら危ないのかという危なさを知っているから、ほとんどケガをしません。リスクを管理するという事は、この感覚的な学びの経験を奪うことなのです。森には危険が多いというイメージは、デンマークでも同じです。本園の森にはフェンスがないため、保護者は心配します。最近の保護者は、子どもを監視したが、管理したがる傾向があります。しかし、子どもを管理するという事は、絶対に良いことではありません。自分で何が危ないかを学んで来なかった子どもは電車で飛び乗ろうとするなど、10代になってかえって危ないことをしようとします。私の子どもの頃を思い返して

みても、学校から帰ると森へ遊びに行き、危ないこともあったと思うけれど、すごく楽しかったことを覚えています。それが今に続いているのだと思います。大人の管理・監視がなかったからこそ面白いのです。こうした経験が子どもにとって大切なのです。私が子どもの頃は、親に外で遊んでくるという一言だけで良かったのですが、今はどこへ行くの？誰と遊ぶの？何をするの？何時に帰るの？と心配する親が多く、GPSで追跡する親もいるくらいです。デンマークでも管理をしたがる保護者、心配性の保護者が少しずつ増えてきたように思います。

柴田：デンマーク全体で、保護者による外遊びのニーズがあるのではないのですか。

イェンセン：ほとんどの保護者が、子どもには自然の中にいてほしいと思っています。頭の中では理屈として、自然遊びや外遊びが大切であることを分かっていますが、情熱をもってそれを実行できていないのです。

だから、園の片付けや足りないものを作ったりする「週末就労日」という保護者の日には、喜んでくれます。

また、国の方針も管理体制になりつつあります。学びのプランを記録する等、子どもの成長をペーパーで記録する方向になってきました。子どもにiPadを持たせるなど、ICTを取り入れる制度ができましたが、私たちは必要ないですし反対しています。

②保護者とのリスクの共有について

柴田：ステンリュースでは、どのようにリスクを保護者と共有していますか。

イェンセン：本園は普通の保育園とかなり異なります。普通の保育園であれば、外遊びの時間が1時間くらいのところもあります。外で遊ぶのが面倒だと考える保育士たちも少なくないのです。私の娘が1歳半の時に入った乳児園では、4か月間で外に出た回数は10回程度でした。それが嫌で毎日外遊びをする園に移りました。ですから、本園の保護者は外遊びや自然遊びに対して理解があり、そのことを大切だと思って子どもを入れている方がほとんどです。ごくわずかですが、虫がいるから嫌だと思っている保護者もいるし、ハイヒールで迎えに来る保護者もいます。ですから、本園では、入園する前に必ず毎日外に出ること、森へ行くこと、子どもにとってリスクをとまなう遊びをすることもあるということを十分に説明します。また、日々の保育に関しては、毎日フェイスブックで写真や動画をアップし、子どもが遊んでいる環境や様子を知らせています。心配する保護者は、映像で自分の子どもの様子を見て確認すれば、安心するのだと思います。これが一番効果のある方法だと思います。もちろん、すべての写真を出すわけではなく、不必要に心配しないような写真を載せるようにしています。

③これから保育者を目指す学生や保育者に対して

柴田：自然が嫌いな保育者や学生に対してどうしたらよいでしょうか。

イエンセン：1番大切な事は、自然の中に連れていくことです。その場所に連れていき、そこでどんな遊びができるかを見せたり、経験したりすることが大切です。

柴田：森という環境にはどのようなメリットがあると思いますか？

イエンセン：第1に、調査から1日1回森へ行くと、うつ病にかかりにくくなる。第2に、緑色は精神的に安定する色である。第3に、学校の授業を屋外にすると子どもの学習意欲や理解度が増す、という研究が報告されています。私の経験からは、前の園では運動能力の低い子、動き方の悪い子は、いろんな道具や指導者を活用しても改善されませんでした。本園では、3か月くらいで子どもの運動能力が高まります。自分で衣服を着替え、リュックから荷物を出し入れしたり、保育者や友達のところへ行くために丘を駆け上がったたり、焚火をするために枝を拾って運んだり、木登りをするために小枝につかまったりと、森での行動には意味と理由があります。



図27. ステンリュースの森の様子



図28. 子ども達の様子



図29. イエンセン氏との撮影

一方的な取り組みやトレーニングには内発的な動機づけや子どもにとっての意味がないことが多いのです。本園の自然環境は、子どもにとって意味のあることがたくさんあるのだと思います。大人にとってではなく、子どもにとっての意味があるかどうかが大変なのです。

5. 考察

3人の実践者によるインタビューは、驚くほど共通する点が多かった。

①リスクやケガに対する保護者の認識について

ウィリアムス氏は、「デンマークは他の国に比べて自由度が高いように思うが、それは保育者の子どもに対する信頼感と保護者の保育者に対する信頼感が圧倒的に高いからだ。」と指摘した。また、「保護者が安心するレベルまで信頼度を高めるということが重要である。」と述べた。この点に関してグランダル氏は、「保護者は本園の価値観を十分に理解し、園とスタッフに対して信頼を置いている。新入園児の保護者に対して一番大切にしていることは、信頼して任せて良いと思うところまで、具体的かつ正確にはっきりと伝えるようにしている。保育活動

やスタッフ対応などに加え、特に森に子どもたちを連れて行くこんな危険やケガをすることがあるということ伝え、危険についても前もってしっかりと説明している。大きなケガをした際の段取りも予め説明している。ケガをすることが良いということではなく、子ども達の成長にとって、森の中での遊びが大切なことであるということ十分に伝えている。」と説明した。イエンセン氏は、「本園では入園する前に必ず毎日外に出ること、森へ行くこと、子どもにとって危険な遊びをすることを十分に説明する。また、日々の保育に関しては、毎日SNSで写真や動画をアップし、子どもが遊んでいる環境や様子を知らせている。心配する保護者は、映像で自分の子どもの様子を見て確認すれば、安心する。」と述べた。二人の話した内容は、デンマークでは保護者が保育者を信頼し、子ども達も保育者を信頼しているという相互の関係が成り立っているから自由度が高いと話したウィリアムス氏の説明を裏付けるものである。このことから、デンマークの森の保育園では、子どもへの信頼と保護者との信頼が保育の礎となり、この信頼こそがリスクをその子の成長の糧とするか、排除すべき事項とするかを決定づける鍵となっていることが分かった。

②子どもの成長とリスクに対する認識について

ウィリアムス氏は、リスクを子どもにとって価値のあるものへ変えることが大切であり、ほとんどの両親が保育園のリスクについて理解し、リスクとチャレンジの関係性についても理解していると述べた。また、転んだら痛いという経験が大切であり痛みを知ることとは、リスクを評価することでもある。経験を通して次にどうしたら良いか、次のステップはどの程度が良いかということ学ぶのであると説明した。この点に関して、グランダル氏はリスクをすべて管理し取り除こうとすることは、子ども達がこうしたら危ないということ学ぶ可能性と機会を奪っていることでもあると共通の見解を示した。イエンセン氏も同様に、子ども達はちょっと危ないと思う経験や自分には難しいけれど挑戦になるという経験をすることによって、自分は何ができるのか、何がまだできないかということを知ることができる。子ども達は、そうした経験によって危ない時にどういう判断が必要なのか、どのように対処したらよいのかということ自分で学んでいく。このような学びや経験は、その後の学校生活を含め生きていく上で必要な力となる。本園の子ども達は、どうしたら危ないのかという危なさを知っているから、ほとんどケガをしない。リスクを管理するということは、この感覚的な学びの経験を奪うことであると説明した。三者に共通して、リスクはそのすべてを回避すべきものではなく、子どもの成長に深く関与する重要な役割であることを強調した。

③リスクに対する保護者との共有について

グランダル氏は、毎日保護者と少しでも良いから子どもの様子についてコミュニケーション

を取ることを大切にしていると話し、イエンセン氏は、SNSを利用して子どもの様子を毎日更新している。さらに、3人に共通していたのは、動物小屋の掃除や遊具の修繕を目的として保護者が来園する「週末就労日」の活用である。この週末労働日を保護者が園庭や自然環境を理解する絶好の機会として捉えていたのである。保護者が子どもの遊びやそこでのリスクを実際に見ながら評価する機会となっているようである。こうした毎回のコミュニケーションに加え、保護者が実際にフィールドに足を運び、視覚的に環境を評価することで保育者と共通した価値観や認識を持つことに繋がっている。それは同時に、不安や心配を信頼へ繋げることでもあるのだ。

このように、子どもの成長やリスクに対する保育者と保護者の認識や価値観が共通しているからこそ、デンマークでは、森の保育園が一般化し定着してきたことに改めて気づくことができた。

6. おわりに

本研究は、保育環境の中のリスクについて、デンマークの森の保育園の実践者へのインタビューを中心に、その解釈やいかに評価されているかを検証した。その結果、デンマークの保育実践において、リスクは回避すべきものではなく、子どもの成長に深く関与する重要な役割であることを保育者、保護者が共通の認識をもって評価していることが明らかとなった。そして、リスクが子どもにとって意味のあるものになるか否かは、子どもの学びがどこにあるのか、また子どもの興味や関心の方向性を大人が理解できているかどうかに関わるということも見えてきた。本研究でインタビュー対象としたデンマークの実践者は、一様に子どもへの信頼が保育の礎となると述べている。この信頼こそが、リスクをその子の成長の糧とするか、排除すべき事項とするかを決定づけるといっても過言ではないだろう。もちろん、子どもへの信頼と合わせて、リスクに対する知識を保育者が持つということは大前提である。その上で、リスクを子どもの成長の契機と捉えられるか、また保護者への理解も促せるかどうかということも、保育者の持つ専門性として問うべきではないかと考える。

〔註〕

- 1) 「ふくしま新生子ども夢プラン」福島県保健福祉部こども未来局こども・青少年政策課 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/21055a/shinseiyumepuran.html> (2018年9月20日現在)
- 2) 今西亜友美, 高橋勇人, 今西純一 (2018) 「森のようちえんにおけるケガの発生と安全対策の現状」, ランドスケープ研究81 (5)
- 3) National Children's Bureau, Play Safety Forum (2008), Managing Risk in Play Provision <http://www.playengland.org.uk/media/120462/managing-risk-play-safety-forum.pdf> (2018.9.20現在)
- 4) 柴田卓 (2016) スウェーデン・デンマークの保育環境に関する一考察, 郡山女子大学紀要, 第52集
- 5) 谷雅泰, 青木真理編著, 柴田卓ほか (2017) 転換期に向き合うデンマークの教育, ひとなる書房, 131-144
- 6) Ellen Beate Hansen Sandseter (2007) Categorizing risky play – How can we identify risk-taking in children's play? *European Early Childhood Education Research Journal*. 15 (2) . 2. 237-252
- 7) Ellen Beate Hansen Sandseter (2009) Characteristics of risky play *Journal of Adventure Education and Outdoor Learning*. 9 (1) . 3-21
- 8) Helen Little, Ellen Beate Hansen Sandseter, Shirley Wyver, (2012) Beliefs about Children's Risky Play in Australia and Norway. *Contemporary Issues in Early Childhood* Volume 13 Number 4. 2012.
- 9) Helen Little (2014) Mothers' beliefs about risk and risk-taking in children's outdoor play. Author's pre-publication version. Article published in *Journal of Adventure Education and Outdoor Learning*, 2015 Vol.15. No.1. 24-39
- 10) Mariana Brussoni, Lise L.Olsen, Ian Pike, David A.Sleet (2012) Risky Play and Children's Safety : Balancing Priorities for Optimal Child Development. *International Journal of Environmental Research and Public Health*. 3134-3148
- 11) Jane Williams-Siegfredsen (2011). *Understanding the Danish Forest School Approach—Early Years Education in Practice*. Routledge.
- 12) 柴田卓, 柴田千賀子 (2018) 保育環境としての「自然」に関する一考察—デンマーク・フィンランドの実践に着目して—, 郡山女子大学紀要, 第54集